



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』（2）：中世後期ドイツの写字生が典拠と取り組む姿勢
Author(s)	寺田，龍男
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要，133，41-57
Issue Date	2018-12-25
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.133.41
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/72310
Type	departmental bulletin paper
File Information	30-1882-1669-133.pdf



ハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』(2)

—中世後期ドイツの写字生が典拠と取り組む姿勢—

寺 田 龍 男*

【目次】

1. はじめに
2. Neue Eeの第5章
 2. 1. 「補足」の例
 2. 2. 「削除」の例
 2. 3. 複数の典拠の混淆 — カイアファをめぐる
3. 展望

【キーワード】ハインリヒ・フォン・ミュンヘン, 世界年代記, 写本, 本文の流動

1. はじめに

1370-80年頃にドイツ語圏南部で成立したハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』(Heinrich von München: Weltchronik)は、現在までに19(ないし18)の完本と9つの断片写本が知られる韻文年代記である¹。基本的には旧約聖書の天地創造から語り始め、イエズスの誕生と復活を経て、もっとも長いものは神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ2世(1194-1250年)までの歴史を、さまざまなエピソードや物語とともに描く。最後の写本は15世紀後半に書写されたものの、多くの写本が作品成立後の約30年間に書かれていることから、大きなブームが短期間続いたのち、またたく間に終息したと推定される。完本は多くが羊皮紙に書かれ、本文が3万行から10万行という莫大な長さである。しかも多数の挿絵が施された写本も少なくない。すなわちどの写本も大きな資力をもって作られたものである。しかしその分量の大きさに加えて、写本間で本文の異同がきわめて大きいことが、研究の活発化を妨げている。

写本間の異同、あるいは本文の流動(削除・追加・縮小・拡大・配置の変更・潤色など)は、前近代であれば本来どこの文化圏でも書記伝承に見られる現象であるが、「流動する本文」(der unfeste Text)は、近年の中世ドイツ文学研究でも高い関心を集めるテーマである(Bumke; 寺田 2005)。ハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』の諸写本における本文の流動性は、ディートリヒ叙事詩の作品群と並び、他のジャンルの作品を圧倒するといえるほど高い(Heinzle, 135-137; Rettelbach, 212)。流動する本文の研究は日本文学でも厚い蓄積があることから、文化的な比較が可能である。ハインリヒの『世界年代記』はもっと注目されてよい。

またこの作品では少なからぬ写本で、ディートリヒ・フォン・ベルン(Dietrich von Bern)が登場する。ディートリヒ・フォン・ベルンとは、476年に西ローマ帝国を滅ぼしたゲルマン人

* 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院・教授
DOI: 10.14943/b.edu.133.41

傭兵隊長オドアケル (Odoaker) を493年に倒した東ゴート王テオドリクス (Theodericus: 451/453-526年) の (中世) ドイツ語による表記であり、文学の世界で形象化した姿でもある。このディートリヒは歴史上の人物として、ハインリヒの『世界年代記』はもとより『皇帝年代記』 (Kaiserchronik), 『ザクセン世界年代記』 (Sächsische Weltchronik), ヤンス・フォン・ヴィーンの『世界年代記』 (Jans von Wien: Weltchronik) など先行する年代記やのちの編年誌、散文年代記など歴史文学や史書でしばしば登場する。それだけでなく、他のジャンルの文芸作品や記録文書にも英雄として現われており (Lienert 2008), 中世ドイツ文学の世界では重要な位置を占める人物である (寺田 1992)。しかもハインリヒの『世界年代記』の写本Go1/H15²では、ディートリヒの歴史叙事詩『ディートリヒの敗走』 (Dietrichs Flucht, 13世紀末) から長い文章が引用されている (寺田 2016)。

こうした本文の流動性への関心やディートリヒ叙事詩との関連性から、筆者はこの年代記に取り組み、その研究の現状と課題を論じた (寺田 2018)。その際いくつかの課題を挙げたが、小稿ではそのうちのひとつである「典拠の入れ替わり」という現象について考える。写本ごとに本文が流動することはすでに述べたが、同じひとりの写字生があるテーマについて記述する場合でも、典拠を替えながら語りを進めることが少なくない³。まとまりのある先行作品があれば、それをそのまま引用してよいはずである。あるいは多少の潤色をしても、ひとつの典拠にとどまる方が容易であると筆者は想像する。しかし実態はそうではない。語りが進む過程で、同じような内容を持つ作品群の中で引用される典拠が頻繁に替わっているのである。なぜそのような執筆をしたのか。この問題にはさまざまなヴァリエーションがあるため、いくつかの代表例ですべてを説明し尽くすことはできない。しかしまず例を示した上で、現在の認識を述べることにしたい。

以下の考察は、新約聖書以降の時代 (Neue Ee⁴) の記述を各写本から編纂したロバート・ショー、ヨハネス・フルニエ、クルト・ゲルトナーの校訂版 (Robert Shaw/Johannes Fournier/Kurt Gärtner (Hrsg.): Die Weltchronik Heinrichs von München. Neue Ee, 以下Neue Ee) の第5章を用いる。冒頭で述べた各写本テキストの大きな流動性ゆえ、本書は特定の写本の本文をすべて再現するのではなく、編者の判断で筋の展開に応じて異なる写本を底本として校訂している。原著者ないし写字生独自の記述らしい冒頭のプロローグ (第1章, 写本Ny1/H3 (New York, Pierpoint Libr., M. 769) による) を除き、その後の第2章からフリードリヒ2世について語る最後の164章まで、合計18,172行のほとんどすべての箇所で典拠が示されている。そのうち第2章から第10章 (キリストの復活をユダヤ人が疑う場面) の途中までは、最も古い形態を残すとされるヴォルフエンビュッテル写本Wo1/H1 (Cod. Guelf. 1.5.2 Aug. 2^o) に依拠している。この写本の筆者は2名いるが、当該部分 (第5章) は1名の手で書かれており、ひとまず一貫性があると考えられる⁵。そこで以下に、典拠となった作品群がどのように処理または改変されているかを見て行く。

2. Neue Eeの第5章

Neue Eeの第5章では、29歳になったイエズスが12人の弟子をとりキリスト教の教えを広める

こと、そしてその過程で起きる様々な事件が、受難（第6章）の前史として伝えられる。本章の主要な出典はフィリップの『マリアの生涯』（Bruder Philipp: Marienleben, 14世紀初頭）である。章全体で1016行のうち、『マリアの生涯』からの引用が652行あり、本文の約64パーセントを占めることから、主要な典拠とみなされる。以下に『世界年代記』の本文を『マリアの生涯』のそれと対照させ、本文流動のあり方とその原因たりうる条件について考える。

2.1. 「補足」の例

Neue Ee第5章の作者は、『マリアの生涯』をかなり忠実に書写している。しかしそれでもさまざまな改変が施されている。ここではまず「補足」の例を挙げよう。息子イエズスの受難を当の本人自身の口から告げられて嘆き悲しむマリアに向かって、イエズスが語りかける場面である。『世界年代記』では、典拠で不明確だった発話主体（イエズス）を明示する補足表現がなされている。左に『世界年代記』の本文を、右に出典である『マリアの生涯』を置く。（以下同様。）

ハインリヒ・フォン・ミュンヘン

『世界年代記』(v. 773-786)

Jesus troesten da begund (773)
sein muter, alz er wol chund,
mit suzzer red minnikleich,
daz si wol gehabt sich.
in allen er gab den segen sein,
er sprach: 'lat ew enpholhen sein
mein liebe mueter', und gie auz
von Martha und Maria hauz.
zu seinen jungern sprach Jesus,
da si chomen fur daz hauz:

'ze Jerusalem wir in gen,
da sol mir ungenad beschehen,
wan ich sol verraten werden
und gehandelt gar unwerden. (786)

(訳文)

イエズスは、やさしさと慈愛に満ちたことばを尽くし、取り乱さぬようにと母親を慰めた。そして彼女たちすべてに祝福を与えて言った。「あなたたちに私の愛しい母を委ねます。」そしてマルタとマリアの家を出た。（以下『世界年代記』781-782行:弟子たちが家の前にやって来た時、イエズスは彼らに言った。）「わたしたちはこれからエルサレムへ行く。そこで私は苦難に見舞われるだろう。私は裏切られ、惨い仕打ちを受けるはずだから。

フィリップ『マリアの生涯』

(v. 6108-6119)

(6108) Jêsus troesten dô begunde
sîne muoter, als er kunde,
mit sũezer rede minneclîch,
daz sî wol gehabtete sich.
in allen gap er den segen sîn.
er sprach 'lât iu enpholhen sîn
mîn liebiu muoter' und gienc ûz
(6115) von Marthen und Marien hûs.

(6116) 'ze Jêrusalêm wir nu gên,
dâ sol mir ungemach geschên.
dâ sol ich verrâten werden
(6119) und gehalten gar unwerde.

2008年に校訂出版された『世界年代記』の本文が写本の字句を忠実に再現しているのに対し、『マリアの生涯』の刊行は1853年である。当時通念として広まり始めた考え方により、この校訂版では本文が、中高ドイツ語のいわゆる標準形で再現されている。しかしその点を除いても、

両作品の本文には明らかに強い対応関係が認められる。正書法が確立していなかった時代なので個々の語句の綴りはしばしば異なるが、ほぼ同じ文言が用いられている。

ハインリヒの記述のみにある2行は、以下の発話の主体がイエズスであることを明示する表現である。これがなくても文脈をたどることは可能だが、写字生は書写の過程でイエズスの語りをすんなりとは理解できなかったのであろう。あるいは例えば、朗読した際に聞き手が理解に困難を来すと予想したことも考えられる。いずれにしても、この補足があることで理解が早まることは間違いなく、文脈の流れを明瞭にするための独自の工夫といえる。

次の例は、イエズスの奇蹟を強調するために行われた補足であろう。

ハインリヒ・フォン・ミュンヘン

『世界年代記』(v. 71-88)

Jesus gab den segen sein (71)
auf daz wazzer, daz wart zu wein,
und der selb wein waz rot.
den knechten Jesus da gepot
den wein auz giezzen und schenken
und hiez si all gemain trinken.
dez nam si all wunnder groz,
da man den selben wein auz goz.
mit dem zaichen sich begund
Jesus den laeuten machen chunt,
und auch an den selben stunden
sein junger an in gelauben gunden.

Darnach Jesus all gemain
sein junger nam und auch die rain
magt Mariam, die muoter sein,
und gingen mit ein ander hain
zu einer stat, die ist genant
Kapharnaum und wol erchant. (88)

(訳文)

イエズスがその(水瓶の)水に祝福を与えると、それは葡萄酒となり、その葡萄酒は赤くなった。召し使いたちに命じてイエズスはその葡萄酒を汲んで盃に注ぎ入れさせ、みなに飲ませた。その葡萄酒が注がれると、人々はみなとても驚いた。この徴^{しるし}によってイエズスは人々に自らを知らしめた。(以下『世界年代記』81-82行: またこの時から弟子たちはイエズスを信じるようになった。)その後イエズスはすべての弟子たちと母親である清い乙女マリアを伴ってある町へ下って行った。そこはカファルナウムと呼ばれ、よく知られたところである。

フィリップ『マリアの生涯』

(v. 5422-5437)

(5422) Jêsus gap den segen sîn
ûf daz wazzer, daz wart wîn
und der selbe wîn was rô. t.
den knehten Jêsus dô gebôt
den wîn ûz giezen unde schenken
und hiez sî al gemeine trenken:
des nam sî alle wunder grôz,
dô man den selben wîn in gôz.
mit dem zeichen sich begunt
(5431) Jêsus den liuten machen kunt.

(5432) Dar nâch Jêsus alle gemeine
sîn junger nam und ouch die reinen
magt Marîn, die muoter sîn,
und giengen mit ein ander hin
ze einer stat, diu ist genant
(5437) Capharnâum und wol erkant.

この部分は「カナの婚礼」(『ヨハネによる福音書』第2章)で知られる、水瓶の水を葡萄酒に変える奇蹟譚に基づく。『マリアの生涯』の記述に補った2行は、この奇蹟によりイエズスの

存在が広く人々の知るところとなっただけでなく、弟子たちが信心を寄せる動機となったことも示す。これも先の例と同じく、より強い印象を与えるための補足といえる。

しかし作者(ないし改作者)による補足としてもっとも注目すべきは、彼(ら)自身の言葉であることを明言した補足であろう。第5章からその典型例を挙げる。『マタイによる福音書』第17章24-27節では、カファルナウムに來たイエズス一行が神殿税を要求される。聖ペトロのどうすべきかという問いに対しイエズスは、湖に行つて釣りをし、最初に捕れた魚の口の中に銀貨が一枚見つかるので、これをイエズスとペトロの分として納めるよう勧める。そこで語り手による本文への介入がある。

ハインリヒ・フォン・ミュンヘン

『世界年代記』(v. 631-644)

sant Peter nicht erliezz (631)
swaz in sein maister tun hiezz.
er nam einen angel und gieng
zu dem se, einen visch er vieng.
dem visch tet er auf den munt,
an der selben stunt
pfenning zwen er da inn vant.
dem mautnaer gab er si zu hant
fuer Jesus und fuer sich,
alz daz ewangelio beweiset mich.
Nach dem gen den ostern tagen
tet got ein wunder, alz ich wil sagen.

in einem dorff hiez Bethania (643)
gesezzen waz Maria Magdalena und Martha.

die heten einen pruder hiez Lasarus.
zu dem selben grozz lieb het Jesus.

(訳文)

聖ペトロはただちに、主に命じられたことに取り組んだ。彼は釣り竿を手に湖へ向かい、魚を捕った。その魚の口を開けると、中に二枚の貨幣(『マタイによる福音書』では一枚の銀貨)があった。彼はそれらをすぐ税吏に渡した。(以下『世界年代記』639-642行:一枚はイエズスのため、もう一枚は自分のためだったと、私は福音書に学んでいます。その福音書によると、復活祭の日が近づいた時、神は一つの奇蹟を行った。その次第はこれからお話ししましょう。)ベタニアという名の村にマグダラのマリアと(その姉)マルタが住んでいた。二人にはラザロという弟がおり、イエズスは好意を抱いていた。

フィリップ『マリアの生涯』

(v. 5964-5975)

(5964) sande Pêter niht enliez
daz in sîn meister tuon hiez.
er nam einn angel unde gienc
zuo dem sê, ein visch er vienc.
ûf dem vische sînen munt
brach er in der selben stunt.
phenninge zwên dar inne er vant,
(5971) den mûtern gap er sî zehant.

(5972) In einem dorf daz was geheizen
Bethâniâ, dâ was gesezzen
Marthâ, Marien Magdalênen
swester. die zwô heten einen
bruoder, der hiez Lazarus,
zuo dem liebe het Jêsus.

典拠を示して読者や聞き手の信頼を得ようとする表現は、中世文学では頻繁に見られる。しかしそれが何故ここで用いられたのだろうか。今日私たちが手にする『マタイによる福音書』では、

銀貨が一枚と記されている（第17章27節）。典拠となった『マリアの生涯』の「二枚の貨幣」という記述との矛盾ゆえに、『世界年代記』の作者は説明の必要を感じてこのような文を創作したと判断する。

語り手が受容者に対してさまざまな典拠を示す表現は、ハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』のほぼ全体で確認される。興味深い現象であるが、それらは総合的な考察を要するので、ここでは指摘にとどめる。

2.2. 「削除」の例

第5章で見る限り、「補足」に対して「削除」の例はさまざまな様相を見せる。ここでは12年間出血に苦しんだ女性をイエズスが癒す奇蹟（『マタイによる福音書』第9章20-22節、『マルコによる福音書』第5章25-34節、『ルカによる福音書』第8章43-47節）を語る本文を比較する。

ハインリヒ・フォン・ミュンヘン

『世界年代記』(v. 426-434)

ein edel fraw chom do dar, (426)

diu waz mer dann zwelf jar

an dem plut siech gewesen,

daz si nie mocht genesen.

si muot die treib und daz plut

und het gegeben grozz gut, (431)

(訳文)

一人の高貴な女性がやって来た。彼女は12年以上もの間血液の病に罹っており（12年以上出血が止まらず）、回復できずにいた。彼女は衝動と出血に苦しみ、大きな財産を投じた、（これ以後『世界年代記』で3行削除されており、文脈も変化しているので訳文も分ける。）

daz ir hilff war geschehen, (432)

doch schamt si sich und torst nicht

chomen fur sein angesicht. (434)

(訳文)

自分を助けてもらえるようにと。しかし彼女は
その身を恥じて、イエズスの面前に出
ようとはしなかった。

フィリップ『マリアの生涯』

(v. 5752-5763)

(5752) ein edel vrouwe kom dô dar,

diu waz mër dan zwelf jâr

an dem bluote siech gewesen,

daz si nie mohte genesen.

sî muot diu tribe und ouch daz bluot

(5757) und het gegeben grôzez guot

(5758) wisen meistern und arzâten

die ir doch niht geholfen hâten.

sî het von Jêsu gern gesehen

daz ir hilfe waer geschehen.

dô schamt sî sich und torste niht

(5763) komen an sîn angesiht.

(訳文)

経験ある術師と医者に。だが彼らは
この女性を救えなかった。彼女はイ
エズスに期待した、

自分を助けてもらえることを。だが
彼女はその身を恥じて、イエズスの
面前に出ようとはしなかった。

病に苦しむ女性が（聖書の訳文に従えば）全財産を投じた相手が、「経験ある術師と医者」であること、そして彼らが無力だったことを示すのは、むしろ描写が具体的になり、理解の助けに

なるはずである。何より、イエズスの奇蹟の大きさがより強調される効果を生むはずである。それにもかかわらず削除したのは何故だろうか。

ここでは、典拠から3行削られたため韻律が崩れていることに注目したい。中世ドイツの韻文作品は通常脚韻を踏む。『世界年代記』の引用文で見ると、426行から434行までの脚韻は以下の組み合わせになっている。

426	427	428	429	430	431	432	433	434
dar	- jar	/	gewesen	-	genesen	/	plut	- gut
						/	geschehen	/
						nicht	-	angesicht

これで明らかなように、432行のgeschehenが孤立している。仮に『世界年代記』の写本Wo1/H1の写字生(改作者)が意図的にこの3行を削除したのであれば、韻律の崩れというリスクを犯してでも、「救ってもらえるよう財産を投じた」という文の形成を優先したことになる。財産をつぎ込んだ相手が誰であるかは明示しなくても理解される、と考えることには無理がない。ただし、この写字生がその典拠の文言を見落とした可能性もある。写本Go1/H15では当該部分が削られず、『マリアの生涯』の記述にそのまま対応する本文が記載されているからである(Neue Ee, 29)。この事実は、Wo1/H1の写字生が直接の典拠としたのは『マリアの生涯』ではなく、『世界年代記』の先行写本である可能性が高いと推測させる。ただし先行写本に並べて『マリアの生涯』を参照していた可能性も無視できない。各写本の筆者がどのような典拠に依拠したかは解明が困難な課題であるが、本文の流動性を考えるのであれば、これを避けて通ることはできない。引き続き考えたい。

2.3. 複数の典拠の混淆 — カイアフアをめぐる

Neue Eeの第5章末尾では、憤るユダヤ人たちに向かって大祭司カイアフアが「民のすべてが滅ぶよりも、一人が死ぬ方がよい」と語る場面がある。ここは『ヨハネによる福音書』が出典である。

(…)その年の大祭司であったカイアフアが言った。「あなたがたは何も分かっていない。一人の人間が民の代わりに死に、国民全体が滅びないで済む方が、あなたがたに好都合だとは思えないのか。」これは、カイアフアが自分の考えから話したのではない。その年の大祭司であったので預言して、イエスが国民のために死ぬ、と言ったのである。(11章49-51節)

一人の人間が民の代わりに死ぬ方が好都合だと、ユダヤ人たちに助言したのは、このカイアフアであった。(18章14節)

イエズスの殺害計画としてよく知られるこの場面は、キリスト教の世界では当然ながら、さまざまな作品で引用されている。小稿で以下に論ずるフィリップの『マリアの生涯』、コンラート・フォン・ハイメスフルトの『主の復活』(Konrad von Heimesfurt: Diu urstende, 1225-30年頃)、ハインリヒ・フォン・ヘスラーの『ニコデモ福音書』(Heinrich von Hesler: Das Evangelium Nicodemi, 1300年頃)、グンダッカー・フォン・ユーデンブルクの『キリストのまもり』(Gundacker von Judenburg: Christi Hort, 13世紀末)でも、それぞれまとまりの

ある記述がなされている。だが『世界年代記』(写本 Wo1/H1)では、これらの作品のひとつから関連部分をまとめて引用するのではなく、それぞれから部分的に引用して語りをまとめる、という手法がとられている。いったい何故にそうした方法で記述したのだろうか。

この問題を考えるため、以下にその場面(イエズスの殺害計画)に至る本文を左に引用し、これとほぼ正確に対応する本文を持つ作品を右に引用する。なお典拠となった作品からは、必要に応じて前後の文も表示する。また正書法が確定していない時代なので、カイアファをはじめとする人名の綴りは一定していないが、ここでは訳語を通例に従い統一する。

まず『世界年代記』第5章957行から978行がフィリップの『マリアの生涯』の6292行から6313行に対応するので、その部分を左右に対照する。

ハインリヒ・フォン・ミュンヘン

『世界年代記』(v. 957-978)

Die schreiber und die pharise (957) und die priester der e,
da si gehorten die red
die Jesus in der predig tet,
si merkten wol daz er si
auch geleich maint da pei.
ainen rat si an vingen,
all gemain si ze sammen gingen,
wie si Jesum moechten toten,
daz si nicht da von zu noten
chomen, wann die lauget in heten
fur einen rechten propheten.
si sprachen: 'sol er lang leben,
wir muezzzen uns im all ergeben.
sol er lang pei uns beleiben,
er mag uns all wol vertreiben.
unser e die wird zerfuert
und unser stat von im zerstoert.
seineu zaichen und sein ler,
alz ez gehornt die Roemer,
si vertreibent uns von unserm land,
und muezzzen auch leiden grozz schand.'

(978)

フィリップ『マリアの生涯』

(v. 6292-6313)

(6292) Die schriber und die Pharise
und die priester ûz der ê,
dô si gehôrten dise rede
die Jêsus in der predege tete,
sî marcten wol daz er sî
alle gelich meinete derbî.
einen râten sî ane viengen,
al gemein sî zesamen giengen,
wie sî Jêsum môhten toeten,
daz sî niht dâ von ze noeten
koemen, wand die liut in hêten
vûr einen rehten gotes prophêten.
sî sprâchen 'sol er langer leben,
wir mûezen im uns alle ergeben.
sol er lange bî uns bliben,
er mag uns alle gar vertriben.
unser ê diu wirt zervuort
und unser stat von im zestôrt.
sîniu zeichen und sîn lère,
als diu gehoerent die Rômaere,
sî tribent uns von disem lande,
sô mûez wir liden grôze schande.'

(6313)

(訳文)

律法学者とファリサイ派の人々、そして法院の祭司たちはイエズスが説教でした話を聞くと、自分たちのこともさして言われたと悟った。彼らは集まって、どうしたらイエズスを殺せるか、また民は彼を真の(『マリアの生涯』ではさらに「神の」)預言者と見なしているので、殺しても自分たちが困らないようにしようと相談した。彼らは言った。「この男が

生き長らえることになれば、われらはみな服従しなければならない。彼を長くわれらの許に留まらせれば、われらがみな追放されるのは必定だ。われらの立法は破られ、われらの城市は彼に破壊される。彼の徴と彼の教え、これをローマ人たちが聞いた^{しるし}ら、われらは彼らにこの国から追放され、大いなる恥辱を被るにちがいない。」

ここでも両作品の本文ではほぼ同じ文言が用いられており、強い対応関係にあるのは明らかである⁶。写本Wo1/H1によるこのテキストは、『世界年代記』の他写本でも同様の対応関係が見られることから (Neue Ee, 44-45), 作品の成立時に、ないし少なくとも成立後の早い段階で、『マリアの生涯』が典拠として引用されていたと考えるべきである。

『マリアの生涯』ではこのあとに、ユダヤ人の大祭司カイアファがイエズスの処刑を提案したことが記される (後述)。『世界年代記』でもその記述はあるのだが、上に引用した前節との間に、コンラート・フォン・ハイメスフルトの『主の復活』の本文とほぼ一致する15行が挿入されている (第5章979行から1003行)。ここも前節と同じく引用と考えるのが自然なので、この部分についてもハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』本文と、コンラート・フォン・ハイメスフルトの『主の復活』で対応する部分 (93-122行) を対照する。

ハインリヒ・フォン・ミュンヘン
『世界年代記』(v. 979-1006)

Alz der herr Cayphas, (979)
der dez jars pischof waz,
dicz mar von dem volk bevand,
also die Juden wurden besant
die der e mit pflagen.
er begund si rat fragen,
waz si dar umb daeuicht guet.
si sprachen: 'diser mensch tuet
solich zaichen der nieman
pei unsern zeiten mer began.
chumt er sein mit leben hin,
die werlt gelaubt gar an in.
so dann die Roemar
vernement disiu maer,
sicherlich die choement mit her.
wider die sei wir gar an wer.
waz hilfft die red mer?
si benement uns gut und er.' -
'Tut so gar zagleich nicht!
waz sein sol, daz geschicht',
sprach Caiphas der weis;
'ainez ratez ich ew beweis,

コンラート・フォン・ハイメスフルト
『主の復活』(v. 93-122)

(93) Als der herre Cayfas,
der des jâres bischof was,
disiu mære bevant,
die juden wurden besant
die der ê mit im phlâgen.
er begunde si râtes vrâgen,
waz sie dar umbe dûhte guot.
si sprâchen: 'dirre mensche tuot
solhiu zeichen der nie man
bî unsern zîten mêr began.
chumt er sîn mit dem libe hin,
diu werlt geloubet gar an in.
sô denne die Rômære
gevreiscent die niuwen mære,
sicherliche, die choment mit her.
wider die sî wir âne wer.
waz touc diu rede mêre?
si nement uns guot und êre.'
'Tuot sô zâgelingen niht!
swaz geschehen sol, daz geschiht,'
sprach Cayfas der wîse;
'eines râtes ich iuch bewise,

der uns wol zu dem pesten chumt	(1001)	(115)	der uns wærliche gefrumt
unt uns sicherlichen frumt.	(1002)	(116)	und uns ze besten staten chumt.
nicht anders ich betrachten chan,			niht anders ich erdenchen chan,
wan pezzet ist daz ain man			wand ez ist guot daz ein man
alain sterib			êr alterseine vervar,
dann allez daz volc verderb.'	(1006)		denne disiu werlt gar
			sô wunderlichen zergê
		(122)	daz ir iht lebendig bestê.

(訳文)

カイアフア殿がこの年の大祭司だったが、彼はこの人々の(『マリアの生涯』では「人々の」ではない)話を聞くと、法を共に守るユダヤ人たちを招集する使者を送った。カイアフアは彼らにどうしたらよいと思うかたずねた。みなこう言った。「あの人は、今の時代に誰もこれほどにはできない徴を示しています。彼が後々まで生き長らえれば、世の人々はみな彼を信じます。そうってからローマ人たちがこの耳新しい話を聞いたら、間違いなく彼らも押し寄せてきます。そうしたらもう抵抗できません。これ以上話して何になるでしょう。私たちは財産も名誉も奪われます。」「そう怖気づかれるな。起きるべきことが起きるのだ」知恵者のカイアフアは続けて言った。「あなた方にひとつの提案をしよう、これならわれらに最大の利をもたらし、また間違いなくわれらのためになる。私に考えられるのは他にもない、一人の男のみ死ぬ方がすべての民が亡びるよりよいということだ。」「(『主の復活』の117行以降は以下のとおり：「私に考えられるのは他にもない、現世が驚くべき滅亡を遂げて誰一人生き残らぬよりは、むしろ一人の男のみ死ぬのがよいことなのだ。」)

『世界年代記』の1001行が『主の復活』の116行に、前者の1002行が後者の115行に対応しているので順番は逆だが、ここも前節と同様の強い対応関係が認められる。ただし『世界年代記』の1004行以降は、後述するハインリヒ・フォン・ヘスラーの『ニコデモ福音書』(414-416行)の方が整合性は若干高い。しかし前節と同様、同じ記述は他写本でも見られることから(Neue Ee, 45-46)、作品成立から写本Wo1/H1が成立するまでの間に『主の復活』が引用されたと考えるべきである。

『世界年代記』でこれに続く1007行から1016行は、カイアフアがイエズスの処刑を主張し、第5章の緊張を頂点まで高める記述である。わずか10行ではあるが、校訂版の編者によれば再び典拠が入れ替わり、まずハインリヒ・フォン・ヘスラーの『ニコデモ福音書』が、そして次にコンラート・フォン・ハイメスフルトの『主の復活』に戻っている。その本文を見よう。

ハインリヒ・フォン・ミュンヘン
『世界年代記』(v. 1007-1011)

ハインリヒ・フォン・ヘスラー
『ニコデモ福音書』(v. 414-421)
(414) 'Ez ist bezzer' sprach Cayphas
'daz ein mensche sterbe,
(416) denn allez daz volc vorderbe'.

(訳文)

カイアフアは言った。「一人の人間
が死ぬ方が、すべての民が滅亡する
よりよいのだ。」

(この3行が『世界年代記』の1004-06行に対応する。)

daz mainet er hincz Christ vil vest, (1007)	(417) Diz meind er hin zu Criste;
dez doch Caiphas nicht recht west,	der red er niht enwiste,
waz dar under verporgen lag,	waz darunder vorborgen lac,
daz unsers herren todes slag	daz unses herren todes slac
alle die werlt hat ernert. (1011)	(421) al die werlt ernerte.

(訳文)

これはむろんキリストをさしていた。しかしカイアフアは、自分の提案に隠された真実を、
すなわちわれらの主の死がこの世のすべての人を生かすことを、知らずにいた。

(右に引いた『ニコデモ福音書』では若干の語句の相違があるが、大意は同じである。)

これに続く部分が再び『主の復活』に依拠する。

ハインリヒ・フォン・ミュンヘン
『世界年代記』(v. 1012-1016)

daz sein tot nicht werd erwert, (1012)
daz betrachten, ob wir muegen.
nu ratet wie wir ez an legen,

daz wir von dem gericht umb seinen tot
sicher sein, dez ist uns weiser ler not. (1016)

(訳文)

その死を妨げられなかったことをわれらは
できるだけ考えましょう。では、私たちが
主の死をめぐる裁判についてたしかなことを
知るためにはどうすべきか相談しましょう。
私たちには賢明な教えが必要なのです。

コンラート・フォン・ハイメスフルト
『主の復活』(v. 123-128)

daz bedenchen, ob wir megen. (123)
und swie wir ez ane gelegen,
ern sol nimmer genesen!
nû râtet wie wir sicher wesen
vor gerihte umbe sinen tôt.
dâ ist uns wiser lêre nôt.' (128)

(訳文)

われらはできるだけ考えよう。いかな
る方法をとるにせよ、あの男は生か
しておいてはならぬ。彼の死をめぐる
裁判でどうしたら安心できるか相談
しよう。われらには賢明な教えが必要
なのだ。」

ここで『世界年代記』の作者ないし(遅くとも写本Wo1/H1の)改作者⁷は、筋の展開に一つ
の改変を行っている。典拠としてコンラート・フォン・ハイメスフルトの『主の復活』だけに
依存していれば、『世界年代記』の997行に始まるカイアフアの言辞は、最後の1016行までカイア
ファ自身の発言だったはずである⁸。ところがこの人物が『ニコデモ福音書』の一節を挿入した
ため、語りの主体は登場人物であるカイアフアから「語り手」に移ってしまった(『世界年代記』
1007-1011行)。そのため以後の文言はほぼ同一であるにもかかわらず、本来カイアフアの発した

言辞は語り手が受容者に語りかける表現となってしまったのである。数回用いられる「私たち」(代名詞wir, uns)が、いずれも語り手が受容者を語りの「場」に包摂する機能を有していることから、それは明らかである。

『世界年代記』第5章はここで終わり、次の第6章には「神が拷問されてから復活したこと」(Wie got gemartert ward und erstund)という見出し文が与えられて新しい語りが始まる⁹。この改変が成功したといえるかどうか、筆者には判断できないが、上述のように、カイアファの言辞は原典である『ヨハネによる福音書』でよく知られている。この部分は当然、他にもさまざまな作品で言及がある。上に見たコンラート・フォン・ハイメスフルトの『主の復活』(118-122行)とハインリヒ・フォン・ヘスラーの『ニコデモ福音書』(414-416行)の他、何よりフィリップの『マリアの生涯』(6314-6319行)ではこう記される。

ein jude der hiez Câþphas, (6314)
der in dem järe bischof was,
er sprach ‘des ist uns allen nôt
daz er lide aleine den tôt,
und bezzer ist er eine sterbe
dan wir müezen alle verderben.’ (6319)

(訳文)

カイアファといい、この年大祭司
である一人のユダヤ人が言った。
「われらすべてのため、あの男が
一人で死を迎えなければならぬ。
あの男一人が死ぬ方が、われら
すべてが破滅するよりよい。」

一方グンダッカー・フォン・ユーデンプルクの『キリストのまもり』(1051-1059行)にも記述があるが、こちらはやや文飾が目立つ。

ein pischolf zeden ceiten was, (1051)
der was gehaizen Cayphas;
der wissagt daz,
er sprach: ‘ez ist michels paz
unt ist nutzer daz ain man
(als ich iu beschaiden chan)
fur alle die werlt lied den tot,
denne daz immer wernde not
alle diu werlt muese leiden.’ (1059)

(訳文)

当時一人の大祭司がいて
名をカイアファといった。
彼はこう予言して言った。
「この世のすべての人が永遠に続く
災難に苦しむよりも、一人の男が
(みなさまにお話しするように)¹⁰
この世のすべての人の代わりに死ぬ
方がずっとよく、また
世のためになるのだ。」

ここまで見てきたように、『マリアの生涯』、『主の復活』、『ニコデモ福音書』はみな同じ内容を語っているにもかかわらず、『世界年代記』の記述はそれらを取捨選択して語り継いでいる。『キリストのまもり』はそれまで出ていないが、実はこれに続く第6章がこの作品からの引用で始まっているのである。『世界年代記』のオリジナルから写本Wo1/H1および他写本の共通祖型に至るまでの過程(Kornumpf; Klein, 43; Neue Ee, XXX)で、少なくとも第5章と第6章に関する限り、誰かが自分の記述の典拠とすべき各作品の写本を比較校合し、独自の語りを案出したと判断される。

3. 展望

ハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』に関する最初の本格的研究を行ったパウ・ギヒテルは、典拠となった『マリアの生涯』の著者フィリップが「なおざりにした」(vernachlässigte) 部分をハインリヒが他の典拠から補ったと判断した (Gichtel, 117)。実際になおざりにしたかはともかく、カイアファによるイエズス殺害の提案に関する記述を『世界年代記』と『マリアの生涯』で比べると、たしかに前者の方が詳しい。

『世界年代記』は写本ごとに内容が大きく異なり、ギヒテルが主な対象としたのがルンケルシュタイン写本M3/H9 (Cgm 7330; 寺田 2018, 118-124) であるのに対し、小稿が考察するのは写本Wo1/H1である。しかしそれでも、ギヒテルの見解には一定の説得力が認められる。写本Wo1/H1を校訂したゲルトナーらの版に脚注で示された他写本、すなわちともに約10万行を有し、この作品でもっとも分量が多いルンケルシュタイン写本M3/H9およびゴータ写本Go1/H15との異同 (Neue Ee, 17-46) を見ると、これらの写本の本文における共通性はきわめて高い。繰り返すが、最古態とされるWo1/H1と他写本の共通の祖型ですでに第5章の語りが出来上がっていたのであろう。

だが、その共通祖型の作者は、なぜフィリップの作品の記述を不十分と判断したのだろうか。いかなる考え方でかくも複雑な作業を行ったのだろうか。筆者にはまだ仮説を立てることができない。しかしあえて想像するなら、作者の姿勢の背後には、強い素材収集欲があったと考えられる。しかも、まとまった記述のある一作品を分断してそこに他作品の記述を埋め込むだけではない。語りの首尾も一貫させる必要があった。そのためには、いくつもの作品を目の前に置き、配列と整合性も熟慮しなければならなかった。作者の素材収集欲は強烈といえるほど強いものだったに違いない。そしてその背後には財力と知的関心をもつ依頼者がいた。さまざまな作品の使用を可能たらしめ、羊皮紙に数万行を書かせ、色刷りの挿絵を施させる力と好奇心をもつ人物の期待に、作者は十分応えなければならなかったのである。

ハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』は1370-80年頃に成立したものの、上述のように多くの写本はその後わずか30年の間に書かれている。しかも完本写本は長いもので10万行に及ぶ。断片写本もそれらに匹敵する長さだったことは想像に難くない。ブームが去るまでの短期間、多くの写字生たちは富強な依頼者の強い関心に後押しされながら、まるでとり憑かれたように、猛烈な新作競争を行ったのではないだろうか。典拠の作者が「なおざりにした」所は多々あるだろう。しかしそれは見方次第である。出典でなおざりにされた箇所を修復し、また詳述するために行った行為が、結果的に、この年代記の特徴としてしばしば形容される「寄せ集め」(Kompilation)と見なされる結果になったのである (Ott (1981); Kornrumpf; Ott (2016))。

以上は現段階の推論である。今後の課題は、ハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』とその典拠となった作品群を比較対照しながら、写字生たちが典拠を次々と変えて語り継いだ行為の背景事情を明らかにすることである。

註

- 1 データはKlein, Spielberger, Neue EeおよびHandschriftencensus: Heinrich von München: 'Weltchronik'. URL: <http://www.handschriftencensus.de/werke/544> (2018年9月28日確認) による。
- 2 ゴータ研究図書館架蔵本 (Cod. Chart. A 3)。コルンルンブフは『世界年代記』の完本写本に1から19の通し番号を与え (Kornrumpf, 500-502), ゲルトナーのグループもこれを踏襲しH1からH19としている。これに対してヴェルツブルク大グループは写本の所在地の頭文字と数字を組み合わせた符号を用いており、現在両系統が混在している。小稿では現状を鑑みて両者を並記する。寺田 (2018, 133-134) も参照されたい。
- 3 写字生が同じ作品の先行写本を改変する行為と、個別の典拠 (さまざまな文芸作品や史書など) を改変しながら引用する行為は、区別する必要がある。
- 4 イエズスの誕生以前, すなわち旧約聖書の時代はAlte Eeという。写本全体を俯瞰するとこの旧約時代に重点を置くものの方が多いのだが, ゲルトナーらのグループは新約以降のテキストを編纂した。
- 5 むろん1人の手になることがその写字生の独創性を証明するわけではない。そもそも写字生がその典拠を流動させたという証拠はなく, 別の写本を忠実に書写した可能性もある。しかし写字生が途中で交替する場合よりは信頼性が高いと判断する。証拠が極めて少ない中で行う考察の第一歩であるので, ここでは, テキストを流動させたのがこの写本の筆者であるかどうかを問わないことにする。
- 6 フィリップの『マリアの生涯』におけるこの部分の記述自体は, 『ヨハネによる福音書』11章45節から48節に間接的に依拠している。フィリップの直接の典拠としてはいくつかのラテン語およびドイツ語文献が想定されているが, 実証されていない (Gärtner, 593f.)。そのためここでは, 『世界年代記』と『マリアの生涯』の照応関係の指摘にとどめる。
- 7 ここで立ち入ることはできないが, 『世界年代記』の原作者自身が, いくつかの異なる「オリジナル」を残した可能性もある。
- 8 『主の復活』の校訂版の編者は会話の終わりを示す引用符を用いたので, これに従う。引用文の訳も引用符 (J) で結ぶ。
- 9 校訂版の編者は「受難」(Passion) という見出しを与えているが (Neue Ee, 46), 便宜のためであり写本にはない。
- 10 1056行の「(みなさまにお話するように)」はカイアファの発言ではなく, この作品の読者や朗読の聞き手などに対する語り手の発言である。

参考文献

(以下叢書名は可能な限り略号を用いる。ただし出版社名と学術誌は略さない。)

1. 作品

- Bruder Philipps des Carthäusers Marienleben. Hrsg. von Heinr[ich] Rückert. Quedlinburg/Leipzig: Basse 1853 (Bibliothek der deutschen National-Literatur 34). Nachdruck Amsterdam: Rodopi 1966.
- Dietrichs Flucht. Textgeschichtliche Ausgabe. Hrsg. von Elisabeth Lienert/Gertrud Beck. Tübingen: Niemeyer 2003 (TSMH 1).
- Gundackers von Judenburg Christi Hort aus der Wiener Handschrift. Hrsg. von J. Jaksche. Berlin: Weidmann 1910 (DTM 18).
- Heinrich von Hesler: Das Evangelium Nicodemi. Hrsg. von Karl Helm. Tübingen: Litterarischer Verein

- in Stuttgart 1902 (Bibliothek des Litterarischen Vereins in Stuttgart 224). Nachdruck Hildesheim/
New York: Olms 1976.
- Jansen Enikels Werke. Weltchronik, Fürstenbuch. Hrsg. von Philipp Strauch. Hannover: Hahn 1891-1900
(MGH; Deutsche Chroniken 3). Nachdruck München: Monumenta Germaniae Historica 1980.
- Die Kaiserchronik eines Regensburger Geistlichen. Hrsg. von Edward Schröder. Hannover: Hahn 1892
(MGH; Deutsche Chroniken 1,1). Nachdruck München: Monumenta Germaniae Historica 1984.
- Der keiser und der kunige buoch oder die sogenannte Kaiserchronik, Gedichte des zwölften Jahrhunderts
von 18,578 Reimzeilen. Hrsg. von Hans Ferd[inand] Maßmann. 3. Theil. Quedlinburg/Leipzig:
Basse 1854.
- Konrad von Heimesfurt: »Unser vrouwen hinvar« und »Diu urstende«. Mit Verwendung der Vorarbeiten
von Werner Fechter hrsg. von Kurt Gärtner/Werner J. Hoffmann. Tübingen: Niemeyer 1989 (ATB 99).
- Rudolfs von Ems Weltchronik. Aus der Wernigeroder Handschrift. Hrsg. von Gustav Ehrismann.
Berlin: Weidmann 1915 (DTM 20). Nachdruck Berlin/Zürich: Weidmann 1967.
- Sächsische Weltchronik. In: Sächsische Weltchronik, Eberhards Reimchronik von Gandersheim,
Braunschweigische Reimchronik, Chronik des Stiftes S. Simon und Judas in Goslar Holsteinische
Reimchronik. Hrsg. von Ludwig Weiland. Hannover: Hahn 1877 (MGH; Deutsche Chroniken 2).
Nachdruck München: Monumenta Germaniae Historica 1980, S. 65-279.
- Die Weltchronik Heinrichs von München. Neue Ee. Hrsg. von Frank Shaw/Johannes Fournier/Kurt
Gärtner. Berlin: Akademie 2008 (DTM 88).
- 共同訳聖書実行委員会『新共同訳聖書』東京：日本聖書協会 2007年.

2. 研究文献

- Brunner, Horst (Hrsg.): Studien zur ›Weltchronik‹ Heinrichs von München. Band 1. Überlieferung,
Forschungsbericht, Untersuchungen, Texte. Hrsg. von Horst Brunner. Wiesbaden: Reichert 1998
(Wissensliteratur im Mittelalter 29).
- Bunke, Joachim: Die vier Fassungen der ›Nibelungenklage‹. Untersuchungen zur Überlieferungsgeschichte
und Textkritik der höfischen Epik im 13. Jahrhundert. Berlin/New York: de Gruyter 1996 (Q&F 8).
- Gärtner, Kurt: Bruder Philipp. In: Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon. 2.
Auflage. Band 7. Hrsg. von Kurt Ruh. Berlin/New York: de Gruyter 1989, Sp. 588-597.
- Gichtel, Paul: Die Weltchronik Heinrichs von München in der Runkelsteiner Handschrift des Heinz
Sentlingers. München: Beck 1937 (Schriftenreihe zur bayerischen Landesgeschichte 28).
- Heinzle, Joachim: Geschichte der deutschen Literatur von den Anfängen bis zum Beginn der Neuzeit.
Band II/2. Wandlungen und Neuansätze im 13. Jahrhundert. 2., durchgesehene Auflage. Tübingen:
Niemeyer 1994.
- Klein, Dorothea: Heinrich von München und die Tradition der gereimten deutschen Weltchronik. In:
Brunner, S. 1-112.
- Kornrumpf, Gisela: Die ›Weltchronik‹ Heinrichs von München. Zu Überlieferung und Wirkung. In:
Festschrift für Ingo Reiffenstein zum 60. Geburtstag. Hrsg. von Peter K. Stein/Andreas Weiss/
Gerold Hayer. Göppingen: Kümmerle 1988 (GAG 478), S. 493-509.
- Lienert, Elisabeth (Hrsg.): Dietrich-Testimonien des 6. bis 16. Jahrhunderts. Hrsg. von Elisabeth

- Lienert unter Mitarbeit von Esther Vollmer-Eicken/Dorit Wolter. Tübingen: Niemeyer 2008 (TSMH 4).
- Ott, Norbert H. (1981): Heinrich von München. In: Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon. 2. Auflage. Band 3. Hrsg. von Kurt Ruh. Berlin/New York: de Gruyter, Sp. 827-837.
- Ott, Norbert H. (2016): Kompilation und Offene Form – Die Weltchronik Heinrichs von München. In: Handbuch Chroniken des Mittelalters. Hrsg. von Gerhard Wolf/Norbert H. Ott. Berlin/Boston: de Gruyter, S. 181-196.
- Rettelbach, Johannes: Studien zur ›Weltchronik‹ Heinrichs von München. Band 2/1. Von der ›Erweiterten Christherre-Chronik‹ zur Redaktion α . Wiesbaden: Reichert 1998 (Wissensliteratur im Mittelalter 30/1).
- Spielberger, Andrea: Die Überlieferung der ›Weltchronik‹ Heinrichs von München. In: Brunner, S. 113-198.
- 寺田龍男 (1992) 「火を吐くディートリヒーディートリヒ・フォン・ベルン研究序説」『ノルデン』29号, 1-23頁.
- 寺田龍男 (2005) 「軍記物語と英雄叙事詩(2) — J. ブムケによる「不確定テキスト」(‘der unfeste Text’) の概念を中心に —」『大学院国際広報メディア研究科・言語文化部紀要』49号, 89-107頁.
- 寺田龍男 (2016) 「『ディートリヒの敗走』からハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』へ — 主人公の「祖先の系譜」について —」『独語独文学研究年報』42号, 1-23頁.
- 寺田龍男 (2018) 「ハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』 — 研究の現状と課題 —」『メディア・コミュニケーション研究』71号, 111-142頁.

【謝辞】

本研究はJSPS科研費15K02399の助成を受けたものである。

The *Weltchronik* of Heinrich von München (2)

— The attitude of late middle german copyists towards their sources —

Tatsuo TERADA

Key Words

Heinrich von München, *Weltchronik*, manuscripts, passion for collecting of material

Abstract

The *Weltchronik* of Heinrich von München (compiled around 1370/80) is known for numerous variations of its manuscript tradition. For the analysis of the open text history two elements should be considered. On the one hand, it is essential to consider the conditions among the manuscripts of the *Weltchronik* such as techniques of adaptation including omission, shortening, extending, and changing of the sequence of narratives in the manuscripts of the *Weltchronik*. On the other hand, the copyists combined the literary models in variable ways so that every manuscript has its own structure. Both of these attitudes among productive writers led to a mishmash of every manuscript.

Heinrich's *Weltchronik* experienced a brief but intensive boom: Almost of all the manuscripts were written in the 30 years following the formation of the original(s) – perhaps there were several originals. Apart from the fragments, the manuscripts of the *Weltchronik* contain between 30,000 and 100,000 verses and are, moreover, often decorated with numerous paintings. It is evident that the patrons had enormous financial means. Every patron expected that his copyist would produce a new version of the *Weltchronik*, and this expectation caused him a passion for collecting of material.